

4つの実践に学ぶ 発達の見点と深めたいこと

みんなのねがい編集部 児嶋芳郎

藤田実践に学ぶ

自我の拡大・充実

自我とは、外界や対象となる他者と自身が他のものであると認識する意識のことです。

Aさんは、年少の頃、やってみたい気持ちがあってもいざやるうとするとう手を引いてしまいい、でも最後には歌や雰囲気のにせられてやってしまう姿がありました。これを藤田さんは「ヤッテシマッタ」と感じていたのではないかととらえています。十分に自我が育っておらず、自分の思いとはちがう行動をしてしまったくやしさをどうするか。しかし、Aさんは、年長

さんになると「ワタシモ、リタイ」という自分の思いをふくらませていきます。

10月の行事では「ヤリマセ」と泣いてしまいます。しかも「やろう」と言われても「ヤラナイ」とハッキリと主張しました。年少の頃とはちがいで、自分の思いをしっかりとつことが出来るがゆえの「ヤラナイ！」であり、自我が太くなってきたのでしょうか。そして2月の1年のまとめの行事。当日が近づくと「ヤラナイ」と言い出したものの、本番では保育者を支えに「デキタ」を感じるこ

とができました。

ちとの関係づくりのスタートとして「たくさん『ありがとう』を言う」ことを大切にしています。自己評価を高めるために「ほめる」ことが強調されることもありますが、島さんは「安易にほめてしまうと『あなたはその程度できれば十分』というメッセージとして受け取られて

しまうことがある」と述べています。人は、自分自身が尊重されていることを実感できるからこそ、「まんざらでもない自分」を感じ、「自分づくり」にとりくめるのではないのでしょうか。また、島さんは、生徒たちが抱える「しんどさ」の多くは、教師が「できるように」なってほ

で充実するものではありません。共感できる仲間や信頼できる大人がいるといった集団の中で、自分自身への手応えを感じられる活動を留意しなければならぬのではないのでしょうか。

岡田実践に学ぶ

困った子は困っている子

「困った子」は「いい子」ではありません。しかし、ここで言う「いい子」とは、「大人にとって都合のいい子」ではないのでしょうか。

岡田さんは、咲ちゃんの言うように絵を描きますが、次第にイライラし、最後には泣いて岡田さんを叩いてしまう…。咲ちゃんが落ち着くまでおんぶしますが、怒ってしまうことが増えていきます。岡田さんは必要がないときも、おんぶでその場を過ぎ、咲ちゃん自身が考え、乗り越えていく機会を奪ってしまっていたのではと考えるようになります。

障害のある人たちが言葉や行

動で表面的に示すものを「受け入れ」、直線的に関わっていくことは、一見すると子どもの思いに沿っているように感じられます。ですが逆に、大人の「都合のいい子」にしようとする、一方的な押しつけかもしれない。岡田さんは「心を置いてけぼりにしていた」と述べていますが、表面的なことに対応されても、子どもの心は満足しません。本当のねがいを「受け止め」られたという実感がなければならぬのでしょうか。

島実践に学ぶ

自分VVS

障害のある青年たちは、それまでのまわりからの評価によって、非常に低い自己評価を抱えてしまっていることがあります。

島さんは、「自分づくり」に向き合っている高等部の生徒た

を再構成していきます。

沙織さんが好きなもの自体は変わっていないかもしれないですが、それをまわりが作品だと受け止め、共感してくれる人たちができたことで、沙織さん自身にとっても「好き」なもの価値が変化し、それがゆたかな人間関係へとつながっていったのでしょうか。

沙織さんは、発達の段階ということでは、同じ段階に留まっているのかもしれませんが、しかし、その内実はゆたかにふくらみ、まわりの人びとの関係もゆたかになっていきます。

発達の段階が高まることだけをめざすのではなく、それぞれの発達の段階にはそれぞれかけがえのない価値があり、現在もっている力を存分にふくらませていくことが、ゆたかな生活につながるという視点も大切なのではないのでしょうか。人間としての深み、ゆたかさとは何かを、考えていきたいものです。

(こじま よしお/立正大学)

◀より学びを深めていくために▶



新版 教育と保育のための発達診断 下 [発達診断の視点と方法]

白石正久・白石恵理子 編
全障研出版部
定価 2750円

教育と保育のための発達診断セミナー (オンラインセミナー)

6月27日(日) 13:00~16:30

- 1) 1歳半の質的転換期から2歳へ
／西川由紀子(京都華頂大学)
- 2) 3、4歳の発達の姿
／藤野友紀(札幌学院大学)
- 3) 幼児期から学童期へ
／楠 凡之(北九州市立大学)

詳細・お申込みは全障研のホームページから!
<http://www.nginet.or.jp>

小林実践に学ぶ 「E」への発達 「働」ななかでたくましく

川越いもの子作業所に入所した当初、沙織さんはリサイクル作業で出た危険な物でも「ほし」と手にしたり、気になるものを取り壊したりする姿があり、それを職員は「問題行動」であると見ていました。しかし、だのとらえ直すことから、実践

で表面的に示すものを「受け入れ」、直線的に関わっていくことは、一見すると子どもの思いに沿っているように感じられます。ですが逆に、大人の「都合のいい子」にしようとする、一方的な押しつけかもしれない。岡田さんは「心を置いてけぼりにしていた」と述べていますが、表面的なことに対応されても、子どもの心は満足しません。本当のねがいを「受け止め」られたという実感がなければならぬのでしょうか。

(こじま よしお/立正大学)